

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY  
アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会  
第18回（2025年度）秋季研究集会 予稿集

2025年11月30日(日)

印刷博物館及びオンライン開催

# アート・ドキュメンテーション学会 第18回(2025年度) 秋季研究集会プログラム/目次

2025年11月30日(日)10時00分~17時00分 印刷博物館及びオンライン開催

10時00分~

## 第86回見学会 印刷博物館 ライブラリー見学 ※現地参加のみ ※TOPPAN小石川本社ビルP&Pギャラリー前集合

13時30分~13時40分

開会挨拶 本間友(アート・ドキュメンテーション学会幹事長)

13時40分~14時40分

## 萌芽研究発表(発表10分コメント5分質疑5分)

13:40~14:00	松山奈穂(川越氷川神社・社史編纂室調査員) 「川越氷川神社における文化資源の活用—『note』を通じた記録と発信の試み—」	P5
14:00~14:20	三谷直哉(文化財防災センター) 「文化財レスキュー事業日報の因子分析: 令和6年能登地震と東日本大震災の構造的比較」	P6
14:20~14:40	石本華江(慶應義塾大学アート・センター)、 新明就太(東京藝術大学先端芸術表現科非常勤講師) 「『動きのアーカイブ』の構築と創造的利用を通じた舞踏譜の解明に関する実証的研究」	P7

14時40分~15時

## ポスター発表(オンラインサイト開催のみ)・休憩

吉岡智佳子(国立国際美術館情報資料室特定研究員) 「事例紹介 ギャラリーココ資料—資料整理と編成、特徴について」概要	P8
内田剛士(早稲田システム開発株式会社) 「デジタルミュージアム・デジタルアーカイブの事例データベースについて」概要	

15時~16時10分

## 研究発表(発表25分質疑5分)・休憩

15:00~15:30	山崎美和(東京国立博物館) 「東京国立博物館ポスター整理の試行錯誤・事例報告 —ミュージアムライブラリーとしての管理方法模索」	P9
15:30~16:00	宮前知佐子、丸川雄三、寺村裕史、日高真吾(国立民族学博物館) 高野明彦(国立情報学研究所名誉教授) 「博物館資料との出会いを広げる展示場情報システムの開発」	P11

16時10分~16時40分

## 各SIG活動紹介

16時40分~16時50分  
萌芽研究賞発表

16時50分~17時  
閉会挨拶 田良島哲(アート・ドキュメンテーション学会会長)

アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内 P13

# 発表者プロフィール

## 萌芽研究発表

### 松山 奈穂（まつやま なほ）

川越氷川神社 社史編纂室・調査員

2023年、日本女子大学大学院修士課程修了。同年より現職にて社蔵資料の整理・公開や社殿建築を中心とした調査研究に携わる。日本女子大学学術研究員としても研究を継続し、2024年より同大学大学院人間生活学研究科博士後期課程に在籍。専門は日本建築史および文化財保存。

### 三谷 直哉（みたに なおや）

国立文化財機構文化財防災センター 研究員

同志社大学文学部文化学科国文学専攻卒業。IT関連企業でのシステムエンジニアを経て、2023年から現職。2024年デジタルアーキビスト資格（特定非営利活動法人日本デジタルアーキビスト資格認定機構）を取得。専門は文化財情報、文化財防災、国文学。

### 新明 就太（しんみょう しゅうた）

東京藝術大学 先端芸術表現科 非常勤講師

ロンドン芸術大学 Central Saint Martins College of Arts and Design 卒業。2021年から現職。専門は映像制作で主に撮影と編集。

映像作家／プロデューサー。有限会社ケーブル・スタジオ主宰。NPO法人 Butohopia 代表理事。2011年から「とりふね舞踏舎」にて三上宥起夫・三上賀代に師事し暗黒舞踏の研究・映像アーカイブ作成活動を行う。現在、エルメス財団のアーカイブ映像制作、日本版 WIRED magazine などの映像コンテンツを制作つつ、東京都現代美術館、東京都写真美術館、ユニセフハウス、カルティエ財団などの映像インスタレーションの展示を手がける。

### 石本 華江（いしもと かえ）

慶應義塾大学アート・センター所員、土方翼アーカイブ担当アーキビスト・学芸員、慶應義塾大学・同大学院 非常勤講師

慶應義塾大学卒業。実演家として2002年より和栗由紀夫+好善社、2003年よりCo.山田うんをはじめ国内外にて数多くのカンパニーに出演する。ソロ作品も含め、アジアやヨーロッパを中心に21ヶ国で上演を行った。土方翼の作舞法「舞踏譜」を現在に伝えるため研究会POHRCを日英米、メキシコにて12年に渡り主催し、また自身も講師として香港、インドネシア、ブルガリアなど15ヶ国に招聘される。2020年より慶應義塾大学アート・センター土方翼アーカイブを担当し、デジタルアーキビストを取得。

2024-25年、米国ホリンズ大学 Dance M.F.A Summer プログラム講師。

## ボスター発表

### 吉岡 智佳子（よしおか ちかこ）

国立国際美術館 情報資料室 特定研究員

西南学院大学大学院国際文化研究科修了。西南学院史資料センターでアーカイブを担当。同センターの新規開設に携り、学院史資料の整理・保管業務はじめ、展覧会などを企画した。その後、佐賀大学美術館、川崎市岡本太郎美術館で学芸員として働き、2023年より国立国際美術館情報資料室の研究補佐員として従事、2025年より現職。アーカイブ、作品管理・公開システムを担当。

### 内田剛史（うちだ たけし）

早稲田システム開発株式会社、株式会社ミュージアムメディア研究所 代表取締役

2004年より現職。代表就任以降、年間で200前後の博物館を訪問。自社が手掛ける博物館専用クラウドサービスの導入施設が500を超える規模

へと成長する中、日本全国の学芸現場で得た知見をフィードバックすべく、近年は独自編集冊子をほぼ毎年刊行。平成29年からは4年間にわたり東京都立図書館協議会委員を務め、令和3年には文化審議会博物館部会・法制度の在り方にに関するワーキンググループに参画。

## 研究発表

### 山崎 美和（やまざき みわ）

独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館学芸企画部博物館情報課 情報資料室長

図書館情報大学（現・筑波大学）卒業。大学図書館、公共図書館、凸版印刷㈱（現・TOPPAN）印刷博物館ライブラリー、（国開）科学技術振興機構（JST）などを経て、2019年から現職。専門は図書館情報学、資料保存。主な共著書に『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ（博物館情報学シリーズ 8）』（樹村房2023）、『専門図書館と著作権 Q&A 第4版』（専門図書館協議会2020）

### 宮前 知佐子（みやまえ ちさこ）

国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 助教

2007年東京工業大学大学院理工学研究科（計算工学専攻）修士課程を修了。同年、凸版印刷株式会社入社。文化資源のデジタルドキュメンテーション手法ならびにドキュメンテーションデータの利活用手法の開発・研究に従事。2019年東京工業大学大学院社会理工学研究科（人間行動システム専攻）博士後期課程修了。博士（工学）。東京工業大学博物館研究員を経て、2022年より現職。三次元計測など情報技術を応用した文化資源のドキュメンテーションや展示手法、サイエンスコミュニケーションに専門を持つ。

### 丸川 雄三（まるかわ ゆうぞう）

国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 教授

2003年に東京工業大学大学院計算工学専攻で博士（工学）の学位を取得。東京工業大学精密工学研究所助手、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授を経て、2013年10月から国立民族学博物館にて勤務。専門は連想情報学に基づく文化情報発信手法の研究。これまで手掛けた主なサービスは、「文化遺産オンライン」、「東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』の世界」、「日本アニメーション映画クラシックス」など。

### 寺村 裕史（てらむら ひろふみ）

国立民族学博物館 学術資源研究開発センター 准教授

2005年岡山大学大学院文化科学研究科博士（文学）の学位を取得。同志社大学文化情報学部実習助手、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員、国際日本文化研究センター機関研究員、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授を経て、2015年4月より国立民族学博物館文化資源研究センター助教。2021年4月から現職。専門は情報考古学・文化情報学に基づく文化資料のデジタル化と情報統合に関する研究。著書に『景観考古学の方法と実践』同成社（2014）など。

### 日高 貞吾（ひだか しんご）

国立民族学博物館 学術資源研究開発センター長 教授

元興寺文化財研究所研究員を経て、2002年より国立民族学博物館助手として着任。2008年に准教授、2019年より教授。博士（文学）。専門は保存科学。主な著書、編著書に、『女乗物—その発生経緯と装飾性』（東海大学出版会2008年）、『博物館への挑戦—何がどこまでできたのか』（三次企画2008年園田直子と共編）、『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』（千里文化財団2012年）、『災害と文化財—ある文化財科学者の視点から』（千里文化財団2015年）、『継承される地域文化—災害復興から社会創発へ』（臨川書店2021年）など。

## 発表者プロフィール

高野 明彦(たかの あきひこ)

国立情報学研究所 名誉教授

1980 年東大理学部数学科卒業。日立基礎研究所での研究により 2000 年

に東京大学より博士（理学）の学位取得。2001～2022 年国立情報学研

究所教授、2002～2022 年東大大学院コンピュータ科学専攻教授を併任。

専門は関数プログラム、連想情報学。主な共著書に、『検索エンジンは脳

の夢を見る 連想情報学』（講談社 2008 年）、『311 情報学』（岩波書店

2012 年）、『検索の新地平』（角川 2015 年）。「Webcat Plus」、「新書マッ

プ」、「文化遺産オンライン」、「想 -IMAGINE」、「ジャパンサーチ」、

「Cultural Japan」などの構築に参加。

# 川越氷川神社における文化資源の活用 —「note」を通じた記録と発信の試み—

Utilizing Cultural Resources in Kawagoe Hikawa Shrine: A Case Study of Documentation and Public Outreach through note

松山 奈穂\*

MATSUYAMA, Naho

Resume:

川越氷川神社は埼玉県川越市に所在する地域の総鎮守である。同社史編纂室では、博物館等に寄託していない近代以降の社蔵資料群（文書約 1,500 点、写真約 52,200 点等）の整理と活用を進めている。その一環として、2024 年 3 月より Web 発信媒体「note」を活用し、神社自らが情報発信を行う場を設けた。本稿では、その発信の経過と得られた知見を報告する。

## 1. 「note」を用いた情報発信の実践

「note」は、note 株式会社が運営するコンテンツ発信プラットフォームであり、文章・写真・イラスト・音声・映像等を、専門的なウェブ構築を経ずに無料で公開することができる。また、細かな SEO 対策を施さなくても関連キーワードで上位表示されやすく、一般読者にも届きやすい拡散性を有している。川越氷川神社では、2025 年 10 月までに 53 本の記事を公開し、累計約 8.4 万回の閲覧があった。

### 1.1 記事の構成と発信の方向性

記事は大きく 4 つの内容に分けられる。

- ① 年中行事や授与品等、季節に合わせて紹介する案内記事（32 本）
- ② 史資料整理に基づき、社史・社宝・社殿・芸能等を取り上げた解説的な記事（8 本）
- ③ 神社職員の日々の社務を紹介する記事（9 本）
- ④ 神社を外から支える伝統技術継承者等への取材記事（4 本）

これらの記事は、案内記事から解説記事へと読者の関心が広がるよう相互に関連づけて構成している。日常的な話題を入口として、歴史的・文化的な内容へ接続し、神社と地域の記録を多面的に社会へ共有する仕組みづくりを模索している。

### 1.2 読者の反応と傾向

閲覧数が顕著に多かったのは、①に該当する参拝体験に直結する内容や、写真を多用した視覚情報に富む記事であった。次に、読者が共感や応援を示す「スキ（いいね）」機能に着目し、スキ数を閲覧数で除した値（以下、スキ率）を算出する

と、1-14% の幅があり、閲覧数が増えるほどスキ率は低下する傾向がみられた。その中で、②の社史や社殿建築の特徴を扱う記事はスキ率 3-7% で推移し、広報的記事に比べると閲覧数は少ないが、関心の深い読者層に支持されていることが示唆された。また、③にあたる社務の様子をイラストで描いたシリーズでは、8-12% と比較的高いスキ率を維持していることが確認できた。さらに、いずれの記事も公開直後に閲覧が集中する一方で、長期的にも一定数の閲覧が継続しており、単発的な情報発信にとどまらない、デジタル・アーカイブとしての効果が窺えた。

## 2. まとめと今後の展望

当神社には、長年にわたり蓄積された多様な文化資源が存在するが、その多くは外部に公開されることのない現場資料にとどまってきた。「note」での発信は、そうした資料や社務の様子を現場の視点から社会にひらく取り組みの一つである。

今後は、並行して進めている社殿の建築史学的研究成果とも連動させながら、専門的知見を日常の文脈に結び直す発信のあり方を探求したい。併せて、神社が受け継ぐ伝統や地域との関わりを、読者が身近に感じられるかたちで共有する方法を検討している。

## 謝辞

記事制作にあたり、編集協力をいただいたライターの野田幾子氏、小林加苗氏に深く感謝申し上げる。

\*まつやま なほ（川越氷川神社・社史編纂室調査員）

# 文化財レスキュー事業日報の因子分析： 令和 6 年能登地震と東日本大震災の構造的比較

Factor Analysis of Daily Reports from Cultural Heritage Salvage Operations:  
A Structural Comparison between the 2024 Noto Peninsula Earthquake  
and the 2011 Great East Japan Earthquake

三谷 直哉\*

MITANI, Naoya

## Resume:

令和 6 年能登半島地震の文化財レスキュー事業で作成された日報を対象に、語彙の定量化と因子分析を実施し、活動構造の可視化を試みた。東日本大震災時の記録との比較を通じて、共通点と差異を明らかにし、活動記録から知識への転換と継承の可能性を検討した。

## 1. 研究背景と目的

被災建物から文化財等を救出・一時保管する「被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）」では、活動内容を日報として記録している。しかし多くは自由記述で、情報が整理されているとは言い難い。そのため経験や判断が暗黙的に蓄積されるにとどまり、継承が困難となっている。

本研究は、令和 6 年能登半島地震の文化財レスキュー日報を分析し、活動構造を可視化するとともに、東日本大震災との比較から知識継承の手がかりを探るものである。

## 2. 資料と方法

令和 6 年能登半島地震における文化財レスキュー事業で、2024 年 2 月から 2025 年 3 月に作成された日報（840 件）を分析対象とした。記述内容から頻出語彙を抽出し、意味の近い語を統合・カテゴリ化して、語彙の出現有無に基づき各日報をベクトル化した。

因子分析は、語彙の関係を誤差が少なく説明できるように要因を抽出する最小残差法を用い、Promax 回転により解釈を容易にした。因子数は並行分析を主基準とし、スクリープロットと固有値 1 以上の基準を参考とした。本手法は東日本大震災の日報分析<sup>1</sup>と同様に、自由記述の出現パターンから因子構造を導出するものである。

## 3. 分析結果と考察

分析の結果、11 の因子が抽出され、「文書資料への対応」「美術工芸品の梱包・処置」「湿害・カビへの初動対応」「考古資料の扱い」「活動体制の構築と会議参加」「拠点不在と調整困難」などが主要な因子として確認された。東日本大震災時に見られた因子との比較から、文化財種別ごとの処置傾向に共通点がみられる一方で、災害特性に由来する違い（例：水損対応の顕在化、拠点体制の未整備）も明らかとなった。因子分析により、日報に内在する暗黙知の構造が明らかとなり、能登地震では水損対応や拠点体制など、災害特性や地域条件に応じた活動傾向が示された。

## 4. 今後の展望

今後は、抽出された因子を基盤に、記述内容の構造化・標準化を進め、個々の判断や経験を知識単位として整理することで、災害対応ナレッジとしての再利用を目指す。

特に、頻出語彙や判断語句をナレッジベース化することで、将来的な検索・対話型活用への展望が開かれる。次のステップとしては、日報記録の構成項目と語彙ラベルの整備、および関係者の協働による「知識単位」の抽出作業が求められる。文化財防災における実践知の継承と可視化に向け、現場知のアーカイブ化を推進したい。

<sup>1</sup> 村井源ほか「東日本大震災後の文化財レスキュー活動日報の因子分析」、『アーカイブズ学研究』No.25, 2016 年

\*みたに なおや（文化財防災センター）

# 「動きのアーカイヴ」の構築と創造的利用を通じた 舞踏譜の解明に関する実証的研究

Movement Archive: Developing a Model for Creative Archival Practice  
and the Preservation of Body Memory

石本華江\*、新明就太\*\*

ISHIMOTO, Kae SHIMMYO, Shuta

Resume:

慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴの資料に加え、新たに舞踏家の実演を3D録画し、土方の創り出した記譜法である「舞踏譜」の解明に向け「動きのアーカイヴ」の構築・公開を目指す。舞踏という身体を通じた芸術表現が、どのようにデジタル技術によって記録・継承されうるかを実証的に検討する。また公開・活用方法自体を討議することにより、舞台芸術アーカイヴの「創造的利用」を推進し、新たな芸術創造の可能性を探求する。

## 1. 舞踏譜と身体記憶の継承という喫緊の課題

舞踏譜は、単なる踊りの継承技術に留まらず、人間の複雑な心理や感情、繊細な神経や制御しがたい生理を巧緻に繰り、操作することで成立している作舞法である。そして残された資料だけでは解説が極めて困難であり、土方に直接学んだ舞踏家たちが高齢化し、その身体記憶が失われつつあるという文化継承の複合的な問題に直面している。弟子たちに残された身体の記憶を詳細に記録することは、失われゆく無形の芸術実践を「身体アーカイヴ」として未来に繋ぐための喫緊の課題である。

## 2. 研究方法：最新技術と「再現プロジェクト」による多角的な記録

この課題に対応するため、科学技術を最大限に活用し、身体を通じた芸術表現がデジタル技術によっていかに記録・継承されうるかを実証的に検討する。主要な手法として、実演の記録には「ニコン可搬型ボリュメトリックビデオシステム」という3D録画技術を導入する。この技術は、実在の「人物等の情報」と「動きの情報」を同時に取得することで、「動きのある」3D映像データを生成し、多面的な映像を残すことを可能にする。これにより、生まれた瞬間に消えていくダンスという芸術形態の保存方法を検討する。

また出演者であった舞踏家本人が稽古過程で書き留めたノートを元に「動き」を再現し、映像で記録化する「再現プロジェクト」を実施する。これらの「動きのコレクション」の活用により、

記号化された舞踏譜の解明、さらには新しい創造の「現場」へと結びつけることが期待できる。

## 3. 今後の展望：創造的利用を通じた「アーカイヴの創造的あり方」のモデル構築

本研究の核心は、単なる資料の保存や歴史的研究に留まらず、資料の「創造的利用」を推進し、新たな芸術の創造に寄与する役割を果たすことにある。さらに「身体の記憶」を記録するこの取り組みは、無形芸術遺産をいかにアーカイブするかを問うことでもある。これは後継者不足に伴う地域の伝統芸能や神事等の消失、また職人などの技術の継承などにも応用できる事例となる。多様な記録技術を批判的に検討すること、特に3D技術とこれまでの記録やその方法論などを比較し、異なる技術が身体知の保存と継承において何を提供し、また何を奪っているのかを分析する。デジタルアーカイヴのもたらす利益を肯定しながらも、批評的な眼差しを持ち、科学技術がもたらすアーカイヴの変容が過去の遺産を未来の創造にどう繋げるかという人文・社会科学的な問いに応える必要性を感じている。

また残されたレガシーを受容し発展させるテストケースとして、舞台芸術の伝統を考える上で一つの指針となることを志向する。その結果、「アーカイヴの創造的あり方」のモデルが構築・発信され、現在の議論に欠如していた視点を補完し、広く社会と接続させることを試みたい。

本発表は科研費基盤(C) 25K03758による研究成果の一部である。

\*いしもと かえ (慶應義塾大学アート・センター)。

\*\*しんみよう しゅうた (東京藝術大学 先端芸術表現科 非常勤講師)。

14時40分～15時

## ポスター発表

吉岡 智佳子（国立国際美術館）

### 「事例紹介 ギャラリーココ資料—資料整理と編成、特徴について」概要

ギャラリーココは、柴谷清子が1966年7月に京都市東山で開廊した現代美術を取り扱うギャラリーである。開廊当時、関西で現代美術を専門に扱うギャラリーは、ギャラリー16や信濃橋画廊など僅かだったため、関西の現代作家たちの貴重な発表の場となった。

ギャラリーココの第1回企画展「リトグラフベスト3」（1966年12月）では、井田照一、船井裕、吉原英雄らの版画を展示した。その後も積極的に版画を展示することで、ギャラリーココが版画作品を扱う画廊という認識が広まった。また柴谷は、若い作家たちが発表の場を持てるよう支援し、同ギャラリーでは2004年の閉廊までに751回の展覧会を開催した。関西における現代美術の発展を担う画廊の1つとなった。

国立国際美術館が収集アーカイブ資料の整理を本格的に実施するにあたり、寄贈されていた段ボール8箱分のギャラリーココ資料も、その対象となった。原秩序が不明瞭な資料群であったが、アイテム毎に目録を取り、整理、編成作業を行った。本発表では、画廊資料整理のケーススタディとしてギャラリーココ資料の整理方法と編成、特徴を紹介し、今後の資料活用と課題を共有する。

内田 剛史（早稲田システム開発株式会社）

### 「デジタルミュージアム・デジタルアーカイブの事例データベースについて」

2010年11月にサービスを開始した博物館収蔵品管理及びデジタルアーカイブシステムである<I.B.MUSEUM SaaS>は、導入実績がまもなく700館に到達するが、このうち400以上がデジタルアーカイブの公開を実現している。また、博物館法改正の影響もあり、ここ2～3年は小規模館も含めて新たにデジタルアーカイブに取り組む博物館が増加している。それに伴って、自館と性質が似ている館がどのような公開手法を探っているかを知りたいという相談が筆者に寄せられてきた。

そこで、I.B.MUSEUM SaaSを使って公開している事例をデータベース化、タイプや構築方法で検索し、自館に合う公開方法を検討するための情報源として参照できる検索サービスを構築した。現在、約400の事例を検索することができる。これからデジタルアーカイブに取り組む館や、すでに公開中であるが改善を検討している館にとって、先行事例を参照し、ヒントを探るデータベースとなれば幸いである。

# 東京国立博物館ポスター整理の試行錯誤・事例報告 ——ミュージアムライブラリーとしての管理方法模索

Case Report : Trial and Error on Organizing Posters at the Tokyo National Museum as a Museum Library

山崎 美和\*

YAMAZAKI, Miwa

## Resume:

東京国立博物館資料館では、戦後以降の自館ポスターを大量に所蔵している。これらはMLAの「L」としての整理方法を検討しつつ、長らく未整理のまま保管されていた。しかし、2022年の開館150周年記念事業に伴い利用頻度が急増したこと、加えて収納スペースの逼迫が深刻な課題となったことから、利用が一段落した2023年より本格的な整理作業を開始した。現在は、所蔵状況の把握と保管分の仕分、保管用特注フォルダの作成、さらに重複資料の大量処分による収納スペースの確保など、初期段階の作業が一段落したところである。まだ緒に就いたばかりではあるが、この段階での取り組みが、同様の課題を抱える他館にとって多少なりとも参考となる可能性があると考える。

本報告では、整理作業の現状と課題を共有するとともに、今後の登録・運用方法について、先行事例を持つ他館からの知見を得ることを目的として発表を行う。

## 1. はじめに

ミュージアムにおける自館ポスターは、活動の記録であると同時に、MLA (Museum・Library・Archives)を横断する資源となり得る重要な資料である。しかし、ポスターは意識的に保存しなければ残りにくいエフェメラ資料であり、活用のためには、所蔵情報へのアクセスが可能で、長期保存を考慮しつつ現物の出納が円滑に行える保管・運用体制の整備が不可欠である。ポスターを収蔵品として体系的に管理しているミュージアムは多いが、ミュージアムライブラリーの資料として扱うには課題が多く、前例も少ない。ミュージアムライブラリーの会<sup>1</sup>において各館の管理方法を調査したところ、多くの館が「検討中」として未整理のまま保管しており、当時は参考となる事例が見当たらなかった。

東京国立博物館（以下「東博」）では、1950年代以降のポスターを数千枚所蔵している。古い資料は他部署から一括して移管されたものであり、暫定的に年代順にキャビネットに収納されているのみで、所蔵の種類や枚数の把握もされていなかった。2022年の開館150周年を迎えるにあたり、前年から利用が急増したこと、出納の際に汚損・破損のリスクがあること、さらにキャビネットの空きスペースが逼迫していたことから、早急

な対応が求められる状況となった。

今回の報告は、まだ初期段階ではあるものの、整理作業の目途が立ち始めた現状を共有することで、同様の課題を抱える他館にとって何らかの参考となることを期待するとともに、当館の今後の課題について他館の知見を得る契機とすべく、発表を行うものである。

## 2. 整理概要

整理前の段階では、ポスターは年代順にキャビネットの引き出しに収納されていたが、企画によっては100枚以上の重複があるものも見られた。そこで、まずは所蔵状況の把握とリスト化を行い、保管対象の仕分けを実施した。その後、収納および出納時の汚損・破損を防ぐための対策を検討し、重複分の処分によって収納スペースの確保を図った。予算・人員ともに限られている中で、主にインターン4名が作業を担当し、2025年8月時点で、企画515件・1,108種類・約2,820枚の所蔵を確認するに至った。

### 2.1 事前検討と課題抽出

- ・貸出運用の想定
- ・データ登録
- ・同一企画の他資料とのデータ連携
- ・ラベルや蔵書印等の装備

\*やまざき みわ（東京国立博物館）

### ・利用と資料保存両立の保管方法検討

#### 1) 所蔵把握と保管分仕分

- ・保存・取扱ルール作成
- ・Excel+画像による所蔵リスト作成
- ・写真撮影（判別できる程度の素人撮影）
- ・保管用上限3枚選出・仕分
- ・企画単位で開催時期順に収納
- ・簡紙に会期、展覧会名鉛筆書き
- ・運搬作業用箱（サイズB1、B2各2個）作成

#### 2) 特注保管フォルダの試作・収納

出納や確認の際にポスターが滑ってキャビネットの引出の中で奥の方に挟まり、折れや破損が生じる事例が少なくなかった。そこで、企画単位でB1サイズが収納可能な二つ折りフォルダを探し、長期保存の観点から糊を使わない仕様のフォルダを試作してもらえる1社に依頼した。フォルダに貼るラベルには紙・糊とともに経年変化の少ない資料保存用のテプラテープ<sup>2</sup>を使用した。

100 フォルダ分収納したが、適度な紙の厚みにより1人でも安全に出納でき、またポスターがキャビネットの奥に挟まる心配もないことを確認した。ただし、フォルダの厚みにより引き出し内の収納数は減るため、一部移動が必要となった。また、予算の制約から一度に全数を作成することは困難であり、5年計画での完了を見込んでいる。

#### 3) 重複資料の処分と収納場所の確保

約4,000枚に及ぶ重複資料の処分については、利用方法などを検討したが、権利関係が不明なため外部への提供は困難と判断し、館内での譲渡後残分は処分した。その結果、キャビネットの引き出し13段分の空き容量を確保することができた。

### 3. 今後の方向性と検討課題

#### 3.1 デジタル撮影

2022年の150周年記念事業に際して一部のポスターは撮影済みであるが、未撮影のものについては、全種類の公開利用を前提とした画像撮影を予定している。

#### 3.2 B0サイズのポスターの収納方法

美術館の絵画ラックのような専用設備の導入

は困難であるが、丸めた状態での保管は避けたいと考えている。現在、平面収納が可能な方法について情報収集中である。

#### 3.3 登録データベースとデータ項目

検索用途と画像利用用途に応じて、2種類のデータベースの運用を検討している。検索用には資料館で既に使用している図書館システムを、画像利用用には情報管理室が管理する画像管理システムの活用を相談中である。後者は権利関係の情報も含める。いずれも当初は館内職員向けの運用とし、体制が整い次第、外部公開も視野に入れている。また、企画によっては図録・小冊子・チラシ・招待券など関連資料も所蔵しているため、これらとのデータ連携方法についても併せて検討している。

#### 3.4 閲覧・貸出を可能とする装備方法の検討

画像の公開と利用促進により、実物資料の利用頻度は減少することが期待されるが、ミュージアムとライブラリーでは閲覧・貸出時の対応が異なるため、1点ずつの登録・装備が必要となる。

ポスター本体には、劣化を促進するラベル等を直接貼付することは避けつつ、大量のポスターを効率的に貸出処理できる方法について検討中である。今後は、保存性と運用性の両立を目指した装備方法の確立を目指す。

### 4. おわりに

当館で発行されるすべてのポスターを網羅的に収集することは現実的に困難であり、一定の漏れが生じることは避けられない。しかし、今後正式なデータベース登録が進むことで、資料の利活用が促進されるとともに、組織内におけるポスター収集の重要性への理解が深まり、より充実したコレクションの構築につながることを期待している。

今後は、他館との情報共有や連携を通じて、ミュージアムライブラリーにおけるポスター資料の保存・活用のあり方をさらに発展させていきたい。

<sup>1</sup> ミュージアムライブラリーの会, [https://www.jads.org/sig/muse\\_lib2019.pdf](https://www.jads.org/sig/muse_lib2019.pdf), (Accessed 2025-10-20) .

<sup>2</sup> TT-テプラプロテクト, <https://www.tokushu-papertrade.jp/product/988/>, (Accessed 2025-10-20) .

# 博物館資料との出会いを広げる展示場情報システムの開発

Design and Development of an Exhibition Information System for Expanding Engagement with Museum Collections

宮前 知佐子\*、丸川 雄三\*、寺村 裕史\*、日高 真吾\*、高野 明彦\*\*

MIYAMAE Chisako, MARUKAWA Yuzo, TERAMURA Hirofumi, HIDAKA Shingo, TAKANO Akihiko

## Resume:

国立民族学博物館は、多様な博物館資料に関する情報を蓄積するための基盤を整備してきた。本研究ではデータ利活用の幅を広げるため、キュレーションの体験を通じて展示への理解を深めるシステムを開発した。2025年に開催した特別展「民具のミカタ博覧会」にて公開し、有効性と課題を示した。

## 1. はじめに

国立民族学博物館は、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト<sup>1</sup>を通じ、多様な博物館資料に関する情報蓄積のための基盤整備をしてきた。このプロジェクトの目的は、国内外の大学・文化施設・現地社会と連携し博物館資料の情報を深化させ、その成果を広く社会へ還元することである。これにより博物館が保持する情報の精度は向上したが、異なる設計思想で構築されたデータベース間の連携や、研究者以外の層へ向けた情報発信が課題として残されている。この課題に対し、複数のデータベースをシームレスに検索できる「みんぱくカレイドスコープ」が開発された。本研究では、さらにデータベース利活用の裾野を広げ、来館者へ博物館資料の活用を促すインラクティブな情報システムを開発し、特別展「民具のミカタ博覧会——見つけて、みつめて、知恵の素」<sup>2</sup>のエピローグにて公開する。本システムは、手軽な検索を実現する直感的なインターフェースを備えた端末を用い、展示を振り返りながら学びを深めることや、来館者と博物館資料との新たな出会いの演出を目指すものである。

## 2. 「民具のミカタ博覧会」の情報展示要件

特別展「民具のミカタ博覧会」の最後に位置するエピローグコーナーは、各展示コーナーで得られた民具の多面的な見方をもとに、来館者を「次の旅へ」と誘う情報展示である。このコーナーに求める要件は、1)展示の振り返りとして展示資料の情報を閲覧できること、2)関心を広げるためさまざまな地域の民具や関連情報に出会えること、

3)理解を深めるため情報を見るだけではなく働きかけや表現ができること、の三点に集約できる。

これらの要件を受けて、2つの独立した情報展示を企画した。ひとつは展示資料への振り返りを促す電子図録システムであり、もうひとつが、世界の民具との新たな出会いをもたらす体験型システムである。本発表が対象とする体験型システムは、民具のデータベースを展示のトピックに紐づいたカードで探索することが可能で、さらに気に入った民具をあつめて自分だけのアクティビティシートをつくることもできることとした。また展示場ではシートをプリントアウトのうえコメントを書き込み、シェアすることもできるように構成した。新たな資料に出会うことで関心を広げ、自発的なキュレーションの体験を通じて展示への理解を深めることを企図した。

## 3. フォーラム型情報ミュージアムデータベースと「想-IMAGINE」

体験型システムに組み込むデータベースとして、特別展示の軸となる「日本の文化展示関連情報データベース」を含め、世界各地の民具を示せるよう6つのフォーラム型情報ミュージアムのデータベースを選定した。これらのデータベースはテーマ毎に異なる仕様で構築されており、入力内容を見ると、語彙の使われ方が異なるなど表記の統一がされていないほか、情報の密度にバラつきがあった。また、専門的な知識を持ち合わせていないユーザを考慮した場合、能動的に単語を入力する検索手法は不向きである。こうした条件に対応できる検索システムとして連想検索エンジ

\*みやまえ ちさこ、まるかわ ゆうぞう、てらむら ひろふみ、ひだか しんご (国立民族学博物館)

\*\*たかの あきひこ (国立情報学研究所 名誉教授)

ンがベースとなる「想-IMAGINE」を選んだ。

この検索システムが実装されれば、同一機関内のデータベースだけではなく、他機関にあるデータベースを併用することも可能である。そこで、フォーラム型情報ミュージアムのデータベースと共同研究先のデータベースを連携させる試みとして、国外にある既存データベースも利用することにした。フォーラム型情報ミュージアムにはヨーロッパ地域のデータベースが存在しないため、この地域の情報を補填できるよう、ヨーロッパ地域のデータベースから、民具を主な資料として扱うノルウェーの民俗博物館「マイハウゲン」のデータベースを今回の実証のため選定した。

#### 4. トピックカードとシートによる出会いの演出

「想-IMAGINE」と7つのデータベースにより、世界の民具を横断的に検索できる環境に目処がついた。しかしテキスト入力を前提とする通常版の「想-IMAGINE」のままでは、操作の煩雑さにより来館者に関心を持ってもらう前に敬遠されてしまう懸念があった。また体験としての魅力にも乏しい。そこで構成案に基づいて、「想-IMAGINE」の検索にカードを用いることとした。RFIDチップを組み込んだカードをかざすと、そのカードに紐づけられたキーワードで「想-IMAGINE」の検索が起動する仕掛けである。今回は展示から選定した27のトピックに対応するカードを用意し、連想検索が適切に機能するようそれぞれに検索用のキーワードを設定した。

次に気になる民具をあつめて「私のミカタ」シートを作成できるアプリを構築した。カードを起点に「想-IMAGINE」で連想検索した世界の民具の一覧から、簡単な操作でその資料を手元に保存できるものである。あつめた資料はシートに最大6点まで並べることができ、そのまま会場のプリンターで印刷することができるようになっている。また印刷時に持ち帰り用のQRコードをあわせて出力し、スマホ等でアクセスすると、あつめた資料や作成したシートを会期中いつでも閲覧でき

るウェブサイトも用意した。

以上のシステムを統合して、エピローグコーナーの情報展示「想-IMAGINE x 民具のミカタ」を実現した。実際にカードをかざして連想検索すると、同じトピックでも地域の違いによって様々な資料があることを体験できた。また展示場でシェアされた「私のミカタ」からは、資料とのつながりの持ち方の多様さに驚かされる結果となった。これらのことから、カードやシートによる演出上の工夫が、それぞれの場面で新たな出会いをもたらす一助になったと言えるだろう。

#### 5. まとめと課題

開発したシステムを、2025年3月20日から6月3日まで開催された特別展「民具のミカタ博覧会」にて公開した。手に取れる紙のカードを用いた検索機能を実装することにより、専門的な知識に依らず、データベースへのアクセスを容易にした。作成したシートを展示場に貼付することで他の来館者と共有でき、オンラインでも家族や友人と共に閲覧できるなど、博物館資料との新たな出会いを広げる体験型サービスを実現した。データベースに即したカードとキーワードの準備には専門知識が必要であり、また、国外データベースとの連携に際しては、固有の文化を機械翻訳することの難しさにも直面した。こうしたノウハウを今後蓄積し共有できればと考えている。

情報展示「想-IMAGINE x 民具のミカタ」は、特別展「民具のミカタ博覧会」向けに開発しました。特別展実行委員会の皆さまをはじめ、関係者の皆さまに深く感謝いたします。本研究は人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「地域文化の効果的な活用モデルの構築」(代表:日高真吾)、同機構機関拠点型基幹研究プロジェクト「フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進」「民博所蔵北欧の日用品に関するデータベース構築」(代表:宮前知佐子)の助成を受けています。

1 「フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進」,  
<https://www.r.minpaku.ac.jp/archforum/index.html>, (Accessed 2025-10-31).

2 特別展「民具のミカタ博覧会——見つけて、みつめて、知恵の素」,  
[https://www.minpaku.ac.jp/ai1ec\\_event/54156](https://www.minpaku.ac.jp/ai1ec_event/54156), (Accessed 2025-10-31).

## ■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイヴ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキヴィスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約300名・機関の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイヴおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体（情報学・芸術学）に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会（ARLIS/UK & Ireland）の *Art Libraries Journal* (2013, Vol.38, No.2) の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行

しています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的要請に即したデータベースの構築、アーカイヴ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

## ■活動内容

- ・研究会、講演会、見学会の開催
- ・地区部会と SIG の活動

現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。また、日常活動の場として、会員の興味に応じて SIG（スペシャル・インタレスト・グループ）を結成することができます。現在、美術館図書室 SIG、デジタルアーカイブサロン SIG、JADS Archives and Archival Methods SIG（学会アーカイブ SIG）、コレクション SIG があり、自由に参加できます。

（地区部会・SIG 連絡先：

<http://www.jads.org/contact/contact.htm#sig>

- ・学会ウェブサイト（日本語版・英語版）の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流
  - ・情報・資料の収集・交換・提供
  - ・アート・ドキュメンテーション関係者の交流
  - ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行
  - ・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持（上記『研究』および学会ウェブサイトで提供）
  - ・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持（学会ウェブサイトで提供）
  - ・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携
  - ・IFLA（国際図書館連盟）の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力
  - ・ARLIS/UK & Ireland 等各国の同種組織との連携
  - ・国際会議等参加支援のための助成金の支給
- その他、この会の活動に必要な事業を行います。

## ■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年3回)、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年1回)の配付を受けられます(賛助会員は各2部送付)。

## ■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000円  
(ただし、65歳以上は4,000円 [自己申告制])
- ・学生会員 4,000円  
(大学学部、大学院などに在学中の学生.申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)
- ・賛助会員(個人または機関・団体) 一口以上  
(一口 30,000円)
- ・団体購読会員 12,000円

## ■ウェブサイト

- ・活動の詳細については、学会ウェブサイトをご参考ください。<http://www.jads.org/>



## ■入会方法

- ・学会ウェブサイトから「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の問合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。

(入会申込書ダウンロード：

<http://www.jads.org/nyukai/nyukai.html>



*Art Libraries Journal* (2013, Vol.38, No.2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

### お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル(株)毎日学術フォーラム内

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp

2025年11月30日現在

# JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY  
アート・ドキュメンテーション学会

# JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第18回（2025年度）秋季研究集会 予稿集

発行日：2025年11月30日(日)

編集・発行：アート・ドキュメンテーション学会

<http://www.jads.org/>